

金太郎

楠山正雄

青空文庫

むかし、金太郎きんたろうという強い子供つよこどもがありました。相模国足柄山らやまやまおくの山奥うに生まれて、おかあさんの山うぼといっしょにくらしていました。

金太郎きんたろうは生まれた時ときからそれはそれは力ちからが強つよくて、もう七つ八つのころには、石臼いしうすやもみぬかの俵たわらぐらい、へいきで持もち上げました。大抵たいていの大人おとなを相手あいてにすもうを取とつても負けませんでした。近所きんじよにもう相手あいてがなくなると、つまらなくなつて金きんた太郎たは、一日森いちもりの中ちゆうをかけまわりました。そしておかあさんに

もらった大きなまさかりをかついで歩いて、やたらに大きな杉の木や松の木をきり倒しては、きこりのまねをしておもしろがつていました。

ある日森の奥の奥に入つて、いつものように大きな木を切つていきますと、のっそり大きな熊が出て来ました。熊は目を光らせながら、

「だれだ、おれの森をあらすのは。」

と言つて、とびかかつて来ました。すると金太郎は、

「何だ、熊のくせに。金太郎を知らないか。」

と言いながら、まさかりをほうり出して、いきなり熊に組みつきました。そして足がらをかけて、どしんと地びたに投げつけま

した。熊くまはへいこうして、両手りょうてをついてあやまつて、金太郎きんたろうの家来けらいになりました。森もりの中で大将たいしょう将ぶんの熊くまがへいこうして金太郎きんたろうの家来けらいになったのを見て、そのあとからうさぎだの、猿さるだの、鹿しかだのがぞろぞろついて来て、

「金太郎きんたろうさん、どうぞわたくしも御家来ごけらいにして下さい。」

と言いいました。金太郎きんたろうは、「よし、よし。」とうなずいて、みんな家来けらいにしてやりました。

それから金太郎きんたろうは、毎朝まいあさおかあさんにたくさんおむすびをこしらえて頂いただて、森もりの中へ出でかけて行きました。金太郎きんたろうが口笛くちぶえを吹ふいて、

「さあ、みんな来こい。みんな来こい。」

と呼びますと、熊を頭に、鹿や猿やうさぎがのそのそ出て来ました。金太郎はこの家来たちをお供に連れて、一日山の中を歩きました。ある日方々歩いて、やがてやわらかな草の生えまわりました。ある日方々歩いて、やがてやわらかな草の生えている所へ来ますと、みんなは足を出してそこへごろごろ寝ころびました。日がいい心持ちそうに当たっていました。金太郎が、

「さあ、みんなすもうを取れ。ごほうびにはこのおむすびをやるぞ。」

と言いますと、熊がむくむくした手で地を掘って、土俵をこしらえました。

はじめに猿とうさぎが取り組んで、鹿が行司になりました。

うさぎが猿さるのしつぽをつかまえて、土俵どひょうの外そとへ持ち出だそうとしますと、猿さるがくやしがつて、むちやくちやにうさぎの長い耳ながみみをつかんでひっぱりましたから、うさぎはいたがつて手てをはなしました。それで勝負しょうぶがつかなくなつて、どちらもごほうびがもらえませんでした。

こんどはうさぎが行司ぎょうじになつて、鹿しかと熊くまが取り組くみましたが、鹿しかはすぐ角つのごと熊くまにひっくり返かえされてしまいました。金太郎きんたろうは、

「おもしろい、おもしろい。」

と言いつて手てをたたきました。とうとういちばんおしまいきんたに金きんた太郎たが土俵どひょうのまん中ちゆうにつつ立たつて、

「さあ、みんなかかつて来こい。」

と言いながら、大手をひろげました。そこでうさぎと、猿と、鹿と、いちばんおしまいに熊がかかつていききましたが、片っぱしからころころ、ころがされてしまいました。

「何だ。弱虫だなあ。みんないつペンにかかつて来い。」

と金太郎が言いますと、くやしがつてうさぎが足を持つやう猿が首に手をかけるやら、大さわぎになりました。そして鹿が腰を押して熊が胸に組みついて、みんな総がかりでうんうんいつて、金太郎を倒そうとしましたが、どうしても倒すことができませんでした。金太郎はおしまいにじれったくなつて、からだを一振りうんと振りますと、うさぎも猿も鹿も熊もみんないつペンにころころ、ころころ土俵の外にころげ出してしまいました。

「ああ、いたい。ああ、いたい。」

とみんな口々に言つて、腰をさすつたり、肩をもんだりして
 いました。金太郎は、

「さあ、おれにまけてかわいいそうだから、みんなに分けてやろう
 。」

と言つて、うさぎと猿と鹿と熊をまわりにぐるりに並ばせて、
 自分がまん中に座つて、おむすびを分けてみんなで食べました。
 しばらくすると金太郎は、

「ああ、うまかつた。さあ、もう帰ろう。」
 と言つて、またみんなを連れて帰つていきました。

二

帰かえつて行く道みち々みちも、森もりの中でかけつくらをしたり、岩いわの上で
 鬼おにごっこをしたりして遊あそび遊あそび行くうちに、大きな谷たに川がわのふち
 へ出でました。水みづはごうごうと音おとを立てて、えらい勢いきおいで流ながれて行い
 きますが、あいにく橋はしがかかかっていませんでした。みんなは、

「どうしましょう。あとへ引ひき返かえしましょうか。」

と言いいました。金きん太郎たろうはひとりへいきな顔かおをして、

「なあにいいよ。」

と言いいながら、そこらを見みまわしますと、ちようど川かわの岸きしに二ふた
 かくえもあるような大きな杉すぎの木きが立たっていました。金きん太郎たろうは

まさかりをほうり出して、いきなり杉の木に両手をかけました。そして二、三度ぐんぐん押したと思うと、めりめりとひどい音がして、木は川の上にどつきりと倒れかかって、りっぱな橋ができました。金太郎はまたまさかりを肩にかついで、先に立って渡つていきました。みんなは顔を見合わせて、てんでんに、

「えらい力だなあ。」

とささやき合いながら、ついでに行きました。

その時向こうの岩の上にきこりが一人かくれていて、この様子を見ていました。金太郎がむぞうさに、大きな木をおし倒したのを見て、目をまるくしながら、

「どうもふしぎな子供だな。どこの子供だろう。」

とひとり言を言いました。そして立ち上がって、そつと金太郎のあとについて行きました。うさぎや熊に別れると、金太郎はひとりで、また身軽にひよいひよいと谷を渡つたり、崖を伝わつたりして、深い深い山奥の一軒家に入つていきました。そこいらには白い雲がわき出していました。

きこりはそのあとからやつと木の根をよじたり、岩角につかまつたりして、ついて行きました。やつとうちの前まで来て、きこりが中をのぞきますと、金太郎はいろいろのの前に座つて、おかあさんの山うばに、熊や鹿とすもうを取つた話をせつせとしていました。おかあさんもおもしろそうに、にこにこ笑つて聞いていました。そのときこりは出しぬけに窓から首をぬつと出して、

「これこれ、坊や。こんどはおじさんとすもうを取ろう。」

と言いながら、のこのこ入って行きました。そしていきなり金太郎の前に毛むくじやらかな手を出しました。山うばは「おや。」
 と言ってふしぎそうな顔つきをしましたけれど、金太郎はおも
 しろがって、

「ああ、取ろう。」

と、すぐむくむく肥ったかわいらしい手を出しました。そこで
 二人はしばらく真つ赤な顔をして押し合いました。そのうちきこ
 りはふいと、

「もう止そう。勝負がつかない。」

と言つて、手を引っ込めてしまいました。それから改めて座り

なおして、山うばに向か^むつて、ていねいにおじぎをして、

「どうも、だしぬけに失^{しつれい}礼^{れい}しました。じつはさつきぼつちやんが、谷^{たに}川^{がわ}のそばで大きな杉^{すぎ}の木を押し倒^{たお}したところを^み見て、おどろいてここまでついて来た^きのです。今^{いま}また腕^{うで}ずもうを取^とつて、いよいよ大^{だい}力^{りき}なのにおどろきました。どうしてこの子は今^{いま}にえらい勇士^{ゆうし}になりますよ。」

こう言^いつて、こんどは金太郎^{きんたろう}に向か^むつて、

「どうだね、坊^{ぼう}やは都^{みやこ}へ出^でてお侍^{さむらい}にならないかい。」

と言^いいました。金太郎^{きんたろう}は目をくりくりさせて、

「ああ、お侍^{さむらい}になれるといいなあ。」
と言^いいました。

このきこりと見せたのはじつは碓井貞光といって、その時
 分日本一のえらい大将で名高い源頼光の家来でした。
 そして御主人から強い侍をさがして来いという仰せを受けて、
 こんな風をして日本の国中をあちこちと歩きまわっているの
 でした。

山うばもそう聞くと、たいそう喜んで、

「じつはこの子の亡くなりました父も、坂田というりっぱな氏を
 持った侍でございました。わけがございましたとこのとおりの山の中
 に埋もれておりますもの、よいつてさえあれば、いつか都へ出
 して侍にして、家の名をつがせてやりたいと思っております。
 そういうことでしたら、このとおりの腕白者でございますが、

どうぞよろしくお願い申します。」

とさもうれしそうに言いました。

金太郎はそばで二人の話を聞いて、

「うれしいな、うれしいな。おれはお侍になるのだ。」

と言つて、小踊りをしていました。

金太郎がいよいよ碓井貞光に連れられて都へ上るといふ

ことを聞いて、熊も鹿も猿もうさぎもみんな連れ立ってお別れを

言いに来ました。金太郎はみんなの頭を代わりばんこになで

やつて、

「みんな仲よく遊んでおくれ。」

と言いました。みんなは、

「金太郎きんたろうさんがいなくなつてさびしいなあ。早くはやえらいたいしよ大将たいしよになつて、また顔かおを見せて下ください。」

と言いつて、名残なごり惜おしそうに帰かえつていきました。金太郎きんたろうはおかあさんの前まえに手てをついて、

「おかあさん、では行いつてまいります。」

と言いいました。そして、貞光さだみつのあとについて、とくいらしく出ていきました。

それから幾いくにち日も幾いくにち日もかかつて、貞光さだみつは金太郎きんたろうを連つれて都みやこへ帰かえりました。そして頼光らいこうのおやしきへ行いつて、

「足柄山あしがらやまの奥おくで、こんな子供こどもを見みつけてまいりました。」

と、金太郎きんたろうを頼光らいこうのお目めにかけました。

「ほう、これはめずらしい、強つよそうな子供こどもだ。」

と頼光らいこうは言いながら、金太郎きんたろうの頭あたまをさすりました。

「だが金太郎きんたろうという名なは侍さむらいにはおかしい。父親ちちおやが坂田さかたという

のなら、今いまから坂田さかた金時きんときと名乗なるがいい。」

そこで金太郎きんたろうは坂田さかた金時きんときと名乗なつて、頼光らいこうの家来けらいにな

りました。そして大きくなると、えらいお侍さむらいになつて、渡辺わたなべ

綱な、卜部うらべ季武すえたけ、碓井うすい貞光さだみつといっしよに、頼光らいこうの四天てん

王のうと呼ばれるようになりました。

青空文庫情報

底本：「日本の神話と十大昔話」 講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年5月10日第1刷発行

1992（平成4）年4月20日第14刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年8月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

金太郎

楠山正雄

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>